

世界の運命の預言 各時代の大争闘 第1章

ユダヤ民族の誇り、エルサレム

▶「もしおまえも、この日に、平和をもたらす道を知ってさえいたら……しかし、それは今おまえの目に隠されている。いつかは、敵が周囲に塁（→要塞）を築き、おまえを取りかこんで、四方から押し迫り、おまえとその内にいる子らとを地に打ち倒し、城内の1つの石も他の石の上に残して置かない日が来るであろう（→AD70年、ローマ軍はエルサレムでのユダヤ人の反乱を鎮圧、多くの城壁を破壊し、神殿を崩壊した）。それは、おまえが神のおとずれの時を知らないでいたからである（→民は神が的から救ってくださる時が来ることを切望していたにもかかわらず、イエスが来ても、イエスを救い主とは認めなかった）」（ルカ 19：42～44）。

→[リビング・バイブル]「永遠の平和がすぐ手の届くところにあったのに、この町はそれをはねつけてしまいました。もう遅すぎます。敵が城壁に土塁を築き、町を包囲し、攻め寄せ、子どもたちもろとも地面にたたきつけるでしょう。一つの石もほかの石の上に残らないほど、完全に破壊されます。この町は神の訪れの時を知らなかったからです。」

▶イエスは、オリブ山の上からエルサレムを見られた。美しい平和な光景が彼の前にひろがっていた。それは、過越の祭りの時であった。

太陽暦・ヘブライ暦・ユダヤ暦・バビロニア暦

太陽暦	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
月(ヘブライ暦)	第一の月	第二の月	第三の月	第四の月	第五の月	第六の月	第七の月	第八の月	第九の月	第十の月	第十一の月	第十二の月	
ユダヤ暦	ニサン Nisan, Nissan	イヤール Iyyar	シバン Sivan, Sivan	タムズ Tammuz	ア ブ Abh, Av	エルール Elul	ティシュリ Tishri	マルハ シユバン Marcheshvan	キスレーヴ Kislev, Kislev	テベツ T'ebeth	シユバツ Sabhath	アダル Adhar, Adar	
バビロニアの月名 ():カナン の古称	ニサン (アビブ)	イヤール (ジウ)	シワン	タンムズ	ア ブ	エルル	ティシュリ (エタニム)	ヘシユワン (ブール)	キスレウ	テベト	シエバト	アダル	
主な行事	←←← 七週間 →→→		●七週祭(シャブオット)→詩編68:2~4を朗読 五旬祭(ペンテコステ Pentecoste ギリシア語) ★ユダヤの三大祭:①過越祭、②七週祭、③仮庵祭				1:新年 新年祭(ロシュ・ハシナ)※1 10:大贖罪日(ヨム・キップール)※2 15~21:●仮庵祭(スコット)		25:宮清めの祭(光の祭り、ハヌカ) (25日~8日間)				
	14~21	●過越祭(パサハ)=ニサン月の14~21日 [①過越祭(過越しの祭り):ニサン月の14日の日没~15日の日没 ②除酵祭(種を入れないパンの祭り):15日の日没~21日の日没]											
		※1:Rash Hashanah(ヘブライ語) (頭)(年)							※2:Yom Kippur(ヘブライ語)大いなる贖罪の日 →レビ記16:29, 23:27, 25:9, 民数記29:7				

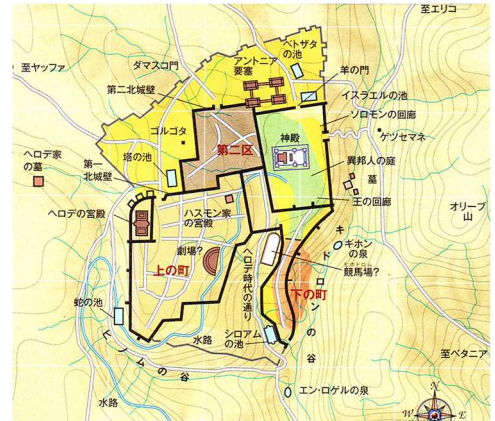
ヤコブの子孫たちは、この国民的大祭を祝うために各地から集まっていた。巡礼者たちの天幕が、庭園にも、ぶどう園にも、緑の斜面にも散在していた。そしてそのまん中に、段々に高くなった小山があって、そこに壮麗な宮殿とイスラエルの首都の巨大な城壁があった。シオンの娘は、誇らかに、わたしは女王の位についている者であって悲しみを知らない、と言っているようであった。幾世紀も前に、詩人ダビデ王が、「シオンの山は……うるわしく、全地の喜びであり、大いなる王の都である」（→詩篇 48：2 シオンの山は北の端が高くて、うるわしく、／全地の喜びであり、大いなる王の都である）と歌った時と同様に、この時もエルサレムは、神の恵みに浴していることを確信しているかのように思われた（詩篇 48：2）。そこには壮麗な神殿の建物が一目で見渡せた。沈んでいく太陽の光が純白の大理石の壁を照らし出し、黄金の門とやぐらと尖塔に輝いていた。それは、「麗しさのきわみ」であり、ユダヤ民族の誇りであった。イスラエル人であれば、この光景をながめて、喜びと賛美に心を震わせないものがあるであろうか。しかし、イエスは、それとは全くかけ離れたことを考えておられた。「いよいよ都の近くにきて、それが見えたとき、そのために泣」かれた（ルカ 19：41）。

すべての者が勝利の入城を祝って、しゅろの葉を振り、喜ばしいホサナ（→ヘブライ語で「どうか、救ってください」の意味）の声を山々に響かせ、大群衆が彼を王と呼んでいるその時に、世界の贖い主は、突然、不思議な悲しみに打ちひしがれた。神の子であり、イスラエルの約束のすえであり、死を征服して墓から死者を呼び出されたお方が、ただ単なる悲しみのためではなくて、抑制しきれぬ激しい苦悩のために、涙を流されたのである。

▶彼は、ご自分がどこに向かって歩まれつつあるのかをよく知っておられたが、しかしこの涙は、ご自分のためではなかった。彼の前には、近づきつつある苦悩の場、ゲッセマネ（→ゲツセマネ）が横たわっていた。幾世紀もの間、犠牲としてささげられる動物が通った羊の門も見えていた。そしてこれは、彼が「ほふり場にひかれて行く小羊のように」ひかれて行く時に、彼のために開かれるのであった（イ

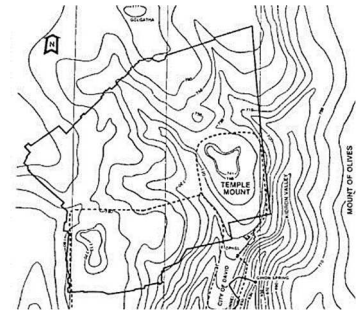
ザヤ 53 : 7 → 苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかつた。屠り場に引かれる小羊のように／毛を刈る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかつた。彼が十字架につけられる場所であるカルバリー（→本来の呼び名はゴルゴタ[アラム語、gulgotha'＝頭蓋骨]）も、あまり遠くはなかつた。まもなくキリストが、ご自分をとがの供え物として歩まれる道は、大きな暗黒の恐怖におおわれなければならなかつた。しかしこの喜ばしい時に彼の心を暗くしたのは、こうした光景を思われたためではなかつた。彼の無我の心は、ご自分の超人的苦悩を予測して曇ることはなかつた。彼が泣かれたのは、滅亡の運命にあるエルサレムの多くの人々のためであった。

彼が祝し救うために来られた人々の盲目と強情のためであった。



選民イスラエルの歴史

▶ 神の特別の恵みと保護を受けた選民の、1000年以上にわたる歴史が、イエスの眼前に展開された。約束の子イサクが、なんの抵抗もせずに犠牲として祭壇にしばられた—それは、神のみ子の供え物の象徴であった—モリヤの山がそこにあった。そこで信仰の父アブラハムに祝福の契約、輝かしいメシヤの約束が確認された（創世記 22 : 9、16～18 参照）。ここは、（エルサレムのモリヤ山にあるエブス人の）オルナン（→名前の語源は「喜びの声を上げる」という意味のラーナン𐤋𐤍𐤏𐤍から来ている）の打ち場から犠牲の炎が天にのぼり、滅びの天使のつるぎをそらせたところであった（歴代志上 21 章を参照）が、それは罪人のための救い主の犠牲ととりなしの適切な象徴であった。エルサレムは、全地のどこよりも、神の栄誉を受けていた。「主はシオンを選び、それをご自分のすみかにしようと望」まれた（詩篇 132 : 13）。



【参考】神の所在

▶ 詩編 48 : 2～3

大いなる主、限りなく賛美される主。わたしたちの神の都にある聖なる山は／高く美しく、全地の喜び。北の果ての山、それはシオンの山、力ある王の都（口語訳：シオンの山は北の端が高く、うるわしく、／全地の喜びであり、大いなる王の都である）。

→ 詩編 50 : 2 麗しさの極みシオンから、神は顕現される。

→ 詩編 76 : 3 神の幕屋はサレムにあり／神の宮はシオンにある。

→ 詩編 132 : 13 主はシオンを選び／そこに住むことを定められました。

→ イザヤ書 2 : 3

多くの民が来て言う。「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう」と。主の教えはシオンから／御言葉はエルサレムから出る。

▶ 今、光は見えないが／それは雲のかなたで輝いている。やがて風が吹き、雲を払うと／北から黄金の光が射し／恐るべき輝きが神を包むだろう（ヨブ記 37 : 21～22）。

▶ ああ、お前は天から落ちた／明けの明星、曙の子よ。お前は地に投げ落とされた／もろもろの国を倒した者よ。かつて、お前は心に思った。「わたしは天に上り／王座を神の星よりも高く据え／神々の集う北の果ての山に座し／雲の頂に登って／いと高き者のようになろう」と（イザヤ書 14 : 12～14）。

▶ わたしが見ていると、北の方から激しい風が大いなる雲を巻き起こし、火を發し、周囲に光を放ちながら吹いてくるのではないか。その中、つまりその火の中には、琥珀金の輝きのようなものがあつた（エゼキエル書 1 : 4）。

▶ わたしはお前を立ち帰らせ、お前を導いて北の果てから連れ上り、イスラエルの山々に来させる（エゼキエル書 39 : 2）。

【参考】オルナン

歴代誌上	21:15 神は御使いをエルサレムに遣わし、これを滅ぼしてしまおうとされたが、御使いが滅ぼそうとするのを主は御覧になり、この災いを思い返され、滅ぼそうとする御使いに言われた。「もう十分だ。その手を下ろせ。」主の御使いはエブス人オルナンの麦打ち場に立っていた。
歴代誌上	21:18 主の御使いは、ダビデにこう伝えるようガドに言った。「ダビデはエブス人オルナンの麦打ち場に上り、主のための祭壇を築かなければならない。」
歴代誌上	21:20 オルナンも振り向いて、御使いを見た。一緒にいた四人の子らは身を隠したが、オルナンは麦を打ち始めた。
歴代誌上	21:21 ダビデがオルナンのところまで来たとき、オルナンはよく見て、それがダビデであることに気づき、麦打ち場から出て、ダビデの前で地にひれ伏した。
歴代誌上	21:22 ダビデはオルナンに言った。「この麦打ち場を譲ってもらいたい。わたしはそこに主のために祭壇を築かなければならない。代価を十分支払ってそれを譲り受け、民から疫病を除きたい。」
歴代誌上	21:23 オルナンはダビデに言った。「お受け取りください。主君、王の目に良いと映るままに行ってください。御覧ください。焼き尽くす献げ物のための牛も、薪にする打穀機も、穀物の献げ物のための麦も、わたしは差し上げます。すべて差し上げます。」
歴代誌上	21:24 ダビデ王はオルナンに言った。「いや、わたしは代価を十分支払って買い取らなければならない。あなたのものを主にささげることはできない。無償で得た焼き尽くす献げ物をささげることはできない。」
歴代誌上	21:25 ダビデはその土地の代金として金六百シケルをオルナンに渡した。
歴代誌上	21:28 そのとき、ダビデは主がエブス人オルナンの麦打ち場でお答えになるのを見て、そこでいけにえを屠った。
歴代誌下	3:1 ソロモンはエルサレムのモリヤ山で、主の神殿の建築を始めた。そこは、主が父ダビデに御自身を現され、ダビデがあらかじめ準備しておいた所で、かつてエブス人オルナンの麦打ち場があった。

➤そこは、各時代にわたって、聖預言者たちが警告の使命を発したところであった。そこで、祭司たちは、香炉をゆり動かし、そして礼拝者の祈りと共に、薫香のけむりが神の前にのぼっていった。そこで、日ごとに、ほふられた小羊の血がささげられて、神の小羊を指し示していた。そこで、主は、贖罪所の上の栄光の雲の中にご自分の臨在をあらわされた。そこに天と地を結ぶ不思議なはしがが立ち、その上を神の使いたちが上り下りしていた。そして、それは、最も聖なるところへの道を世界に開いたのである（創世記 28 : 12、ヨハネ 1 : 51 参照）。もしイスラエルが国家として、天の神に忠誠をつくしたならば、エルサレムは、神に選ばれたものとして、永遠に立ったことであろう（エレミヤ 17章 21 ~ 25 参照）。しかし、あの恵まれた民の歴史は、背信と反逆の記録であった。彼らは、天の神の恵みに反抗し、自分たちの特権を乱用し、機会を軽んじたのであった。

→創世記 28 : 12 すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。

→ヨハネによる福音書 1 : 51 更に言われた。「はっきりしておく。天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見ることになる。」

天の最上の賜物

➤イスラエルは「神の使者たちをあざけり、その言葉を軽んじ、その預言者たちをのりつけた（→罵った）」けれども、神はなおもご自分を、「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いくしみと、まこととの豊かなる神」として彼らにあらわされた（歴代志下 36 : 16、出エジプト 34 : 6）。彼らが何度も拒んだにもかかわらず、神は、恵み深く彼らに訴えつづけられた。父が、その息子を憐れむ以上の愛をもって、「主はその民と、すみかをあわれむがゆえに、しきりに、その使者を彼らにつかわされた」（歴代志下 36 : 15）。勧告と懇願と譴責がむだであることが明らかになると、神は、天の最上の賜物をお与えになった。いやそれだけではない。神は、その1つの賜物によって、全天を注ぎ出されたのである。

➤神のみ子ご自身が、かたくなな町に訴えるために送られた。エジプトからイスラエルをよいぶどうの木として携え出されたのは、キリストであった（詩篇 80 : 8）。彼は、ご自身の手で、その前から異邦人を追い払われた。

▶彼は、それを「土肥えた小山の上に」植え、それを保護するために、そのまわりに垣をつくられた。また、彼のしもべたちが、それを育てるためにつかわされた。「わたしが、ぶどう畑になした事のほかに、何かなすべきことがあるか」と彼はおおせられるのである（イザヤ 5：1～4）。彼はよいぶどうの結ぶのを待ち望んだのに、結んだものは野ぶどうであった。それでもなお、実を結ぶのを熱望して、なんとかしてこれを滅びから救おうと、彼ご自身がぶどう畑においでになった。彼は、ぶどうの回りを掘り、はさみを入れ、たいせつに育てられた。彼はご自分が植えたぶどうを救うためには、あらゆる努力をおしまれなかった。

▶こうして、3年の間、光と栄光の主は、彼の民と共に過ごされた。彼は、「よい働きをしながら、また悪魔に押えつけられている人々をことごとくいやしながら、巡回され」た。彼は、心のいためる者をいやし、捕われている者に解放を告げ、見えない人の目を開き、足の不自由な人を歩かせ、聞こえない人に聞かせ、ハンセン病人をきよめ、死人を生きかえらせ、貧しい人々に福音を伝えられた（使徒行伝 10：38、ルカ 4：18、マタイ 11：5参照）。「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」という恵み深い招きが、すべての階級の人々に同様に発せられたのである（マタイ 11：28）。

▶善に報いるに悪をもってされ、愛に報いるに恨みをもってあしらわれても、彼は、たゆまず慈悲深い働きを続けられた（詩篇 109：5参照）。彼の恵みを求めた者で、拒まれた者は1人もなかった。彼は**家なき旅人として、屈辱と窮乏の生活を送られたが、彼の生きる目的は、困窮者に奉仕し、人々の苦しみを和らげ、彼らに生命の賜物を受けるように訴えることであった**。恵みの波は、かたくなな心によって押しかえされても、言葉では表現できない慈悲深い愛の大きな潮となって、また返っていった。それにもかかわらず、イスラエルは、その最上の友であり唯一の援助者であるお方に背を向けた。彼の愛の訴えはさげすまれ、彼の勧告は退けられ、彼の警告はちょう笑された。

ああ、エルサレム、エルサレム

▶希望と赦しの時は、急速に過ぎ去りつつあった。長く延ばされていた神の怒りの杯は、今にも満ちようとしていた。各時代の背信と反逆によって、暗雲は無気味にその濃さを増し、罪深い民に向かって今にも破裂しようとしていた。しかも、彼らの上にさし迫った運命から彼らを救うことのできる唯一のお方が、軽べつされ、虐待され、拒否されて、まもなく十字架につけられようとしておられた。キリストがカルバリーの十字架につかれるならば、神に恵まれ、祝福された国としてのイスラエルの日は終わるのであった。ただ1人の魂を失うことであっても、世界じゅうの富と財宝を失うことよりはるかに大きな不幸である。しかしキリストがエルサレムをごらんになった時、滅亡にひんした都市全体と国家全体が、彼の前に横たわっていた。それは、かつては神に選ばれ、神の特別の宝であった都市であり、国家であった。

▶昔の預言者たちは、イスラエルの背信と彼らの罪の罰として下る恐るべき荒廃とを嘆いたのであった。エレミヤは、彼の目が涙の泉となり、民の娘の殺された者のためと主の群れのかすめられた者のために、昼も夜も嘆くことができるようにと願った（エレミヤ 9：1、13：17参照）。それでは、数年ではなくて、幾時代もの先を預言的眼光をごらんになった方の悲しみは、どんなであったことだろう。彼は、滅びの天使が、長く主の住居であった都に向かって剣を上げているのを見られた。彼は、後年ティトゥス※とその軍隊が占領したオリブ山上の同じ場所から、（キドロンの）谷の向こうの神殿の庭と柱廊とをごらんになった。そして、涙にかすむ目で、外国の軍隊が城壁を包囲する恐ろしい光景をごらんになった。彼は、進軍する軍隊の足音を聞かれた。彼は、籠城中の婦女子が食物を求める叫び声を聞かれた。彼は美を極めた聖なる神殿や王宮や塔が、炎に包まれ、あとかたもなく廢墟と化してしまうのをごらんになった。

※：ティトゥス・フラウィウス・ウェスパシアヌス：ローマ帝国の第10代皇帝、在位：79年6月24日～81年9月13日。先帝ウェスパシアヌスの長男、母はフラウィア・ドミティア、弟はドミティアヌス帝（ローマ帝国の第11代皇帝）。

▶彼（→エレミヤ）は、はるか未来に目を注ぎ、契約の民が、「さばくに散らばる破片のように」、各地に離散するのを見られた。エルサレムの子らの上に下ろうとしていたこの世の応報は、**最後の審判**の時に彼らが1滴もあまみず飲みほさなければならぬ怒りの杯の、ほんの一口に過ぎないことを彼はごらんになった。こうして、神の憐れみと熱烈な愛は、悲しい言葉となってみ口からもれたのである。「ああ、エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、おまえにつかわされた人たちを石で打ち殺す者よ。ちょうど、めんどりが翼の下にそのひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それなのに（＝それなのに）、おまえたちは応じようとしなかった」（→マタイによる福音書 23 : 37）。ああ、他のすべての国にまさって恵まれた国よ、もし、おまえが、おまえの神のおとずれの時を知り、平和をもたらす道を知ってさえいたら。わたしは、刑罰の天使をとどめて、おまえに悔い改めをうながしたが、むだであった。おまえが拒み退けたのは、単にしもべや代理人、預言者たちではなくて、おまえの贖い主、イスラエルの聖者なのだ。もし、おまえが滅びるならば、それは、おまえだけの責任である。「しかも、あなたがたは、命を得るためにわたしのものにこようともしない」（→ヨハネによる福音書 5 : 40）。

世界の滅亡の象徴

▶キリストは、不信と反逆によってかたくなになり、急速に神の刑罰を受けようとしていた世界を、エルサレムが象徴しているのを見られた。墮落した人類の不幸に、キリストは深く心を痛み、あのように激しい苦悶の叫びをあげられたのであった。彼は、人間の悲惨と涙と流血とが物語る罪の記録を見られた。彼の心は、地上で悩み苦しむ者のために、無限の憐れみを感じられた。彼はなんとかしてこうしたすべての人々を救いたいと熱望されたのである。しかし、彼のみ手をもってしても、人間の不幸の潮は止めかねるように思われた。彼らの唯一の援助者であるキリストを求める者が、少ないからであった。彼は、人々に救いをもたらすために、死に至るまで自分の魂を注ぎ出そうとしておられたのに、**生命を得るために彼のところに来る者は少ないのであった。**

▶天の君主が涙を流しておられる。無限の神のみ子が、み心を悩まし、悲嘆にくれて打ち伏された。この光景に全天は目を見はった。この光景は、罪がどんなに恐ろしいものであるかをわれわれに示し、また、無限の力を持たれた神でも、神の律法を破った結果から罪人を救うことがどんなに困難であるかを示している。イエスは、はるか最後の時代までをながめ、エルサレムの滅亡を招いたのと同様の欺瞞に、世界が陥っているのを見られた。**ユダヤ人の大きな罪は、彼らがキリストを拒んだことであった。キリスト教会の大きな罪は、天地を支配する神の統治の基礎である神の律法の拒否ということである。**主の戒めは、軽べつされ、無視されるのであった。罪に束縛され、サタンの奴隷となり、第二の死に定められた無数の者が、神のおとずれの時に、真理の言葉を聞こうとしないのである。それは、なんと恐ろしい盲目、なんと不思議な愚かさであろう。

歴史的に見たエルサレムの神殿

▶過越の祭りの2日前、キリストは、ユダヤの指導者たちの偽善を非難したあと、神殿に最後の別れを告げてから、もう一度弟子たちと共に、オリブ山に行き、都を見おろす傾斜面の青草の上におすわりになった。彼は、もう一度、都の城壁と塔と王宮とをごらんになった。もう一度、聖なる山を飾る美しい王冠のような、まぶしく輝く神殿をごらんになった。

▶その時から1000年ほど前に、詩篇記者は、イスラエルの聖なる家をご自分の住居となさった神の恵みをほめたたえた。「その幕屋はサレムにあり、そのすまいはシオンにある。」**神は、「ユダの部族を選び、神の愛するシオンの山を選ばれた。**神はその聖所を高い天のように建て」られた（詩篇 76 : 2、78 : 68、69）。**最初の神殿は、イスラエルが歴史上最も隆盛をきわめた時代に建てられた。**ダビデ王は、このために、莫大な財宝を集めた。そして、**その設計は、神の靈感によってなされた**（歴代志上 28 : 12、19参照）。

▶**イスラエルの王の中で最も賢明であったソロモンが、その工事を完成した。**この神殿は、世界で最も壮麗な建物であった。しかし、主は、預言者ハガイによって、第二の神殿について、次のように言われ

た。「主の家の後の栄光は、前の栄光よりも大きい。」「わたしはまた万国民を震う。万国民の財宝は、はいつて来て、わたしは栄光をこの家に満たすと、万軍の主は言われる」(ハガイ 2 : 9、7)。↓

【参考】神殿

第一神殿 (ソロモン神殿)

BC1000 年頃、イスラエルの二代目の王ダビデ (在位 : BC 1010~970 頃) が建設を計画し、その息子のソロモン王 (在位 : BC 970~BC 931 頃) によってエルサレム旧市街、神殿の丘に建設された神殿 (ソロモンがイスラエルを支配してから 4 年目に建設を始め 7 年後に完成した)。

BC 587/586 年、バビロン (バビロニア軍) のネブカドネツアル二世がエルサレムを占領 (エルサレム攻囲戦)、ユダヤ人はバビロンに捕囚となり、神殿も破壊された。

第二神殿 (エルサレム神殿、ヘロデ神殿) →ヘブライ語で「ヤハウエの家」と呼ばれた。

BC 539 年頃、ペルシアのキュロス二世がバビロンを占領、バビロンに捕囚となっていたユダヤ人は解放され、帰国と神殿の再建を認めた。バビロンのネブカドネツアル二世によって破壊されたソロモンの第一神殿に代わって、BC 515-ダレイオス王の治世第六年 (BC 516 年) -に、ゼルバベルの指揮でエルサレムの神殿の丘に建設された神殿 (近隣の民による絶えざる妨害により、神殿再建の事業は BC 536 年から 520 年まで中断を余儀なくされた→エズラ記 4 : 4~5、6 : 14~15)。

後、ヘロデ王 (在位 : BC 37 年~BC 4 年) が BC 20 年から増改築工事を開始し、AD64 年によく完成した (完全改築に近い形で大拡張された) ことから、**ヘロデ神殿**とも呼ばれる。AD 70 年、ローマ軍によって破壊され、現在は「嘆きの壁」と呼ばれる外壁の一部が残っている。

AD 7 世紀末には、この地にイスラム教のモスク (アクサ・モスクおよび岩のドーム) が建てられた。

第三神殿 (未完成)

ユダヤ人がエルサレムの「神殿の丘」に再建しようとしている神殿。

【参考】岩のドームは、イスラム教最大の聖地メッカのマスジド・ハラームの中心部にある「カアバ」、
「預言者のモスク」(サウジアラビア西部の都市メジナにあるイスラム寺院) に次ぐ、東エルサレムにあるイスラム教の第 3 の聖地で、イスラム教徒の管理下にある。

南西の壁の外側の一部だけが嘆きの壁としてユダヤ教徒の管理下にある。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教にとって重要な関わりを持つ聖なる岩 (Foundation Stone) を祀っている。



↓

➤神殿 (→第一神殿) は、ネブカデネザル (ネブカドネツアル二世) に破壊されたあとで、キリスト誕生の約 500 年前に、長年にわたった捕囚生活から、荒廃した故郷に帰ってきた人々によって再建された (→第二神殿)。その時、人々の中には、ソロモンの神殿の栄光を見た老人たちがいて、新しい建物の基礎が以前のものとは比べてはるかに劣っているのを嘆いた。こうした人々の気持ちを預言者は、「あなたがた残りの者のうち、以前の栄光に輝く主の家を見た者はだれか。あなたがたは今、この状態をどう思うか。これはあなたがたの目には、無にひとしいではないか」と、力をこめて言っている (ハガイ 2 : 3、エズラ 3 : 12 参照)。この時、この後の家の栄光は、前の家の栄光より大きいという約束が与えられた。

➤しかし、**第二の神殿は、荘厳さにおいて、第一の神殿の比ではなかった**。また、第一の神殿に与えられていた神の臨在の目に見えるしるしはなかった。その献堂を記念する超自然的力の現われもなかった。栄光の雲が新築の聖所を満たすのも見られなかった。祭壇の上の犠牲を焼きつくす天からの火もなかつ

た。至聖所のケルビムの間に、シェキーナーは、もう宿っていなかった。そこには、契約の箱も贖罪所もあかしの板もなかった。神に問う祭司に、主のみこころを告げる天からの声はなかった。

▶何世紀もの間、ユダヤ人は、ハガイによって与えられた神の約束の成就を示そうと努めてきたが、むだであった。しかし、誇りと不信が彼らの心を盲目にし、預言者の言葉の真の意味を理解させなかった。第二の神殿は、主の栄光の雲ではなくて、肉体をとって現われた神ご自身、満ちみちているいっさいの神の徳が宿っている方の生きた臨在によって、あがめられるのであった。ナザレの人イエスが神殿の庭で、教え、いやされた時、「万国民の財宝（万国の願うところのもの・文語訳）」が、ほんとうに彼の神殿に来られたのである。キリストが来られたこと、ただそのことだけで**第二の神殿は、第一の神殿の栄光をしのいだ。**

▶しかし、イスラエルは、天から与えられた贈り物を退けてしまった。その日、けんそんな教師イエスが、黄金の門から出られた時に、栄光は、永久に神殿から去ったのである。「見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう」という救い主の言葉は、すでに成就したのであった（マタイ 23：38）。

エルサレム滅亡の預言

▶弟子たちは、神殿の破壊に関するキリストの予告を聞いて、恐れと驚きに満たされ、彼の言葉の意味をもっとよく知りたいと願った。神殿の壮麗さを増すために、財宝と労力と建築上の技術とが、40年以上にわたって注ぎこまれていた。**ヘロデ大王も、ローマとユダヤ両国の財宝を惜しみなく費やし、ローマ皇帝さえも贈り物をささげて神殿を壮麗にした。**信じられないような巨大な白い大理石が、この目的のためにローマから回送され、建物の1部に用いられた。そして弟子たちは、これらの石に主の注意をひいて、「先生、ごらんなさい。なんという見事な石、なんという立派な建物でしょう」と言った（マルコ 13：1）。

▶ところが、これに対して、イエスは厳粛で驚くべき答えをされた。「よく言うておく。その石1つでもくずされずに、そこに他の石の上に残ることもなくなるであろう」（マタイ 24：2）。

▶エルサレムの滅亡という、弟子たちは、キリストが世界国家の王座につき、かたくなユダヤ人を罰し、国家をローマのくびきから解放するために、この世の栄光のうちに来られる時のできごとを連想した。主は彼らに、ご自分がもう1度こられることを語っておられたから、彼がエルサレムの滅亡のことを言われた時、彼らはその再臨のことを思った。そこで、彼らがオリブ山上で救い主のそばに集まった時に、「いつ、そんなことが起るのでしょうか。あなたがまたおいでになる時や、世の終りには、どんな前兆がありますか」と彼らは聞いた（マタイ 24：3）。

▶未来のことは、憐れみのうちに、弟子たちから隠された。もしも、彼らがこの時、贖い主の苦難と死、そして都と神殿の破壊という2つの恐ろしいできごとを全部知ったならば、彼らは恐怖にうちひしがれたことであろう。キリストは、終末の前に起こる主要事件のあらましを彼らに示された。その時、彼の言葉は十分に理解されなかった。しかし、その意味は、神の民がそこに与えられている教訓を必要とする時に明らかにされるのであった。彼が言われた預言には、二重の意味があった。それは、エルサレムの滅亡を予告するとともに、最後の大きい日の恐怖をも予表していた。

▶イエスは、耳を傾けている弟子たちに、背信したイスラエルに下る刑罰、特に、メシヤを拒んで十字架につけることに対して下る懲罰報復を明らかにされた。恐るべき頂点に達する前に明白なしるしが現われる。恐怖すべき時が、突然、急速にやってくる。救い主は、弟子たちに次のように警告を寄せられた。「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つのを見たならば（読者よ、悟れ）、そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ」（マタイ 24：15、16、21：20、21参照）。エルサレムの城外、数マイルにわたる聖地に、ローマ人の異教の軍旗が立てられる時、キリストに従う者たちは、安全をもとめて逃げなければならなかった。警報が見えたならば、のがれることを望むものはためらってはならなかった。避難警報は、エルサレム城内と同様に、ユダヤ全土において、直ちに従うべきものであった。屋上にいる者は、どんなに大切な宝物であっても、それを取りに家の中に入ってはならなかった。畠やぶどう畑で働いていたものは、日中働いていた時に脱いでおいた上衣を取りに帰ってはならなかった。彼らは、一瞬でもためらってはならなかった。さもないと一般の人々と

共に滅びにまき込まれてしまうのであった。

➤エルサレムは、ヘロデ王の治世に大いに美化されたばかりでなく、塔、城壁、要害などが建てられ、それに地形が自然の要害となっていたので、難攻不落の城と思われていた。こうした時に、エルサレムの滅亡を公に予告するものは、洪水前のノアのように狂気じみた杞憂家と呼ばれたことであろう。しかし、キリストは、「天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない」と言われた（マタイ 24：35）。エルサレムは、その罪のために刑罰の宣告を受けていたが、そのかたくなな不信によって滅亡を決定的にしたのであった。

罪惡の巢エルサレム

➤主は、預言者ミカによって、次のように言われた。「ヤコブの家のかしらたち、イスラエルの家のつかさたちよ、すなわち公義を憎み、すべての正しい事を曲げる者よ、これを聞け。あなたがたは血をもってシオンを建て、不義をもってエルサレムを建てた。そのかしらたちは、まいない（→賂＝贈物、賄賂）をとってさばき、その祭司たちは価をとって教え、その預言者たちは金をとって占う。しかもなお彼らは主に寄り頼んで、『主はわれわれの中におられるではないか、だから災はわれわれに臨むことがない』と言う」（ミカ 3：9－11）

➤このみ言葉は、腐敗に陥り自分を義とするエルサレムの住民を、正確に描写していた。彼らは、神の律法の教えを厳格に守っているといいながら、そのすべての原則を犯していた。彼らは、キリストの純潔と聖潔とが彼らの罪惡を暴露したために彼を憎んだ。そして、自分たちの罪のためにふりかかってきた苦難について、その原因は彼にあると言って非難した。彼らは、キリストが無罪であることを承知の上で、国家の安全を保つためには彼の死が必要であると宣言した。「もしこのままにしておけば、みんなが彼を信じるようになるだろう。そのうえ、ローマ人がやってきて、わたしたちの土地も人民も奪ってしまうであろう」とユダヤの指導者たちは言った（ヨハネ 11：48）。もしキリストを犠牲にしまえば、彼らは、もう1度強力な統一国家になることができる。このように考えて彼らは、全国民が滅びるよりは1人の人が人民に代わって死ぬほうがよいという大祭司の決定に、同意したのであった。

➤このようにして、ユダヤ人の指導者たちは、「血をもってシオンを建て、不義をもってエルサレムを建てた」（ミカ 3：10）。彼らは、救い主が彼らの罪を譴責されたために、彼を殺しておきながら、なお自分たちは神に恵まれていると考え、神が彼らを敵の手から救ってくださると期待するほどに自分を義としていた。「それゆえ、シオンはあなたがたのゆえに田畑となって耕され、エルサレムは石塚となり、宮の山は木のおい茂る高い所となる」と預言者は言った（同・3：12）。

➤神は、エルサレムの運命がキリストご自身の口から宣言されてから40年近くも、都と国家に対する刑罰を延ばされた。福音を拒否し、神のみ子を殺害した者に対する神の寛容は驚くべきものであった。神がユダヤ国民を扱われる方法が、実を結ばない木の譬によくあらわされている。「その木を切り倒してしまえ。なんのために、土地をむだにふさがせて置くのか」という命令がすでに出されていた（ルカ 13：7）。しかし、神の憐れみは、なおしばらくの間、それを猶予しておられた。ユダヤ人の中には、キリストの品性と働きについて無知なものがまだ多くあった。子供たちは、彼らの親が拒否した光に接する機会も、それを受ける機会もなかった。神は使徒たちやその仲間たちによって、彼らに光を輝かそうと望まれた。彼らは、キリストの誕生と生涯だけでなく、その死と復活についても、預言がどのように成就したかを見せられるのであった。子供たちは親の罪の罰を受けるのではなかった。しかし、子供たちが、親に与えられたすべての光を知った上で、さらに自分たちに与えられた光を拒む時、彼らは親の罪にあずかる者となり、彼らの惡の升目を満たすのであった。

サタンの支配

➤エルサレムに対する神の忍耐は、ただユダヤ人のかたくなな不信に陥れるだけであった。彼らは、イエスの弟子たちを憎み、虐待して、最後の憐れみの招きを拒んでしまった。その時、神は、彼らから保護の手を引き、サタンとその使いたちに対する神の抑制力を除去された。そして国家は、その選んだ指導者のなすままになった。

▶イスラエルの人々は、邪悪な衝動をしずめる力を彼らに与えることのできるキリストの恵みを、退けてしまった。そこで、今度は、こうした衝動が優位を占めた。サタンは、人間の心の中の最も激烈で卑しい感情をよびおこした。人々は、道理をわきまえなかった。彼らは理性を越えた衝動と盲目的な激しい怒りに支配された。彼らは、悪魔的残酷さをあらわしてきた。家庭においても国家においても、上流階級においても下層階級においても一様に、疑い、ねたみ、憎しみ、争闘、反逆、殺人などが行われた。どこも安全ではなかった。友人も親族も、互いに裏切り合った。親は子供を殺し、子供は親を殺した。国民の指導者たちは、自分自身を統御する力がなかった。押えきれない感情が彼らを暴君にした。ユダヤ人は、神の罪なきみ子を罪に定めるために、偽証を受け入れたのであった。そして今、偽証が、彼ら自身の生命を脅かしていた。彼らは、その行動によって、長い間、「われらが前にイスラエルの聖者をあらしむるなかれ」と言ってきた（イザヤ 30：11 文語訳）。今、彼らの願いはかなえられた。彼らはもう神を恐れなくなった。サタンが、国家のかしらとなった。そして政治と宗教の最高の権威者たちは、彼の支配下にあった。

▶対立する諸党派の指導者たちは、時には結束して、哀れな犠牲者たちを襲って苦しめるかと思うと、今度は互いに攻め合い無慈悲に殺害し合った。神聖な神殿でさえ、彼らの恐ろしい残忍さをとどめることができなかった。礼拝者が祭壇の前で殺され、聖所は死体によって汚された。しかし、この凶悪な行為の扇動者たちは、その盲目で神をないがしろにした思い上がりから、エルサレムは神ご自身の都であるから、滅亡する恐れはないと公言していた。彼らは権力を確保するために、にせ預言者を買収して、ローマの軍隊が神殿を包囲している時でさえ、神の救いを待つべきであると人々に言わせた。群衆は、至高者であられる神が敵を滅ぼすために介入なさることを、最後まで信じていた。しかし、イスラエルは、神の保護を退けてしまっていたから、今、なんの防備もなかった。不幸なエルサレムよ。内紛に裂かれ、同志の手で殺害された子らの血が、都の通りを赤く染め、その上異邦人の軍隊が要塞を破壊し、兵士たちを殺害したのである。

▶エルサレムの滅亡に関するキリストの預言はみな、文字どおり成就した。ユダヤ人は、「あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう」というキリストの警告の言葉が事実であることを、身をもって知った（マタイ 7：2）。

▶災害と滅亡を予告するしるしと不思議があらわれた。真夜中に、神殿と祭壇の上に異様な光が輝いた。戦いのために戦車や勇士たちが集結するのが、日没の時、雲の上に描き出された。夜間、聖所で奉仕する祭司たちは、不思議な物音に驚かされた。地が震え、「われわれはここを去ろうさろう」と大勢の声が叫ぶのが聞こえた。20人がかりでもしめられないほど重く、しかも堅い敷石に深く打ち込まれた鉄のかんぬきで閉じられた東の門の扉がだれもいないのに、夜半に開かれた。

▶また、7年の間、1人の男がエルサレムの町をあちこちとへめぐって、都に下る災いについて叫びつづけた。彼は、昼も夜も、激しい悲しみの歌をうたった。「東からの声。西からの声。四方からの声。エルサレムを責め、神殿を責める声。新郎と新婦を責める声。全国民を責める声。」この不思議な男は投獄されて、きびしく罰せられたが、一言もつぶやきの言葉をもらさなかった。彼は、侮辱とののしりに対して、「エルサレムは、わざわいだ、わざわいだ。」「エルサレムの住民はわざわいだ、わざわいだ」と答えるだけであった。彼の警告の叫びは、彼が自分の予告したその包囲の中で殺されるまでやまなかった。

キリスト者の奇跡的な脱出

▶エルサレムが滅亡した時、キリスト者は1人も死ななかった。キリストが弟子たちに警告を発しておられたので、彼のみ言葉を信じたものは、みな、約束のしるしに注意していた。「エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、そのときは、その滅亡が近づいたとさとりなさい。そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。市中にいる者は、そこから出て行くがよい」とイエスは言われた（ルカ 21：20、21）。ローマ軍は、ケスティウス（→ガイウス・ケスティウス・エプロ：古代ローマの政務官、供儀の七人官、護民官、法務官を務めた）の指揮のもとに都を包囲したが、すべてが即時攻撃に好都合であると思われたにもかかわらず、不意に撤退してしまった。

▶籠城していた側では包囲に耐えかねて、今にも降伏するばかりになっていた時に、ローマの将軍は、一見、なんの理由もないのに、軍隊を撤退させたのである。しかしこれは、神が神の民のために事件のなりゆきを導かれる憐れみに満ちた摂理であった。すでに約束のしるしは、待っているキリスト者に与えられていた。そして、今、救い主の警告に従おうとするすべての者に機会が与えられた。事件は、神の支配下にあったので、ユダヤ人もローマ人も、キリスト者の避難を止めなかった。ケスティウスの退却を見たユダヤ人は、エルサレムを飛び出して敵軍のあとを追った。両軍の交戦中に、キリスト者は都を去ることができた。この時、彼らの避難の妨害になったかもしれない敵の軍勢も、国内から追い払われていた。包囲された時、ユダヤ人は仮庵の祭りを祝うためにエルサレムに集まっていた。したがって全国のキリスト者は、無事のがれることができた。彼らは直ちに安全な場所へ、ヨルダンの向こうにあるペレアの地のペラの町に避難した。

▶ケスティウスとその軍隊を追跡したユダヤ軍は、これを全滅させるかと思われる勢いで後方から攻めた。ローマ軍は、非常な困難のなかでやっと退却した。ユダヤ軍は、ほとんど損失をこうむらずにすみ、戦利品を携えて、意気揚々とエルサレムに引きあげた。しかし、この勝利と思われたことは、ただ彼らを不幸にただけであった。これは、ローマ人に対する頑強な抵抗心を彼らにいだかせ、滅亡にひんした都を言語に絶する苦難に陥れた。

ティトゥスの再攻撃とエルサレムの惨状

▶ティトゥスがふたたび包囲した時、エルサレムに起こった災難は悲惨なものであった。都の包囲は、城内に幾百万のユダヤ人が集まっていた過越の祭りの時に起こった。注意深く保存すれば、数年は住民を養うことができたはずの食糧の蓄えは、相争う党派のしつとやふくしゅうのためにすでになくなり、人々は、今や飢餓の恐怖にさらされていた。

▶小麦1升の価は1タラントであった。人々は、非常な飢えのために、帯皮やサンダル、また盾のおおいかんだりした。多くの者は、夜間城外に忍び出て、城壁の外に生えている野草を取ろうとしたが、その多くは捕えられて惨殺された。また、無事帰ってきた者も、非常な危険を冒して集めたものを他の人に奪われてしまうのであった。権力者が、窮乏に陥った者から、隠しているわずかの食物を奪い取るために加えた拷問は、実に残忍なものであった。こうした残忍なことは、十分に食物を持っていながら、ただ将来のために蓄えておこうとする人々によって、しばしば行われたのであった。

▶無数の者が、飢えと病気で倒れた。人間本来の自然な愛情は失われてしまったように思われた。夫は妻から、妻は夫から奪った。子供は、老いた親の口から食物をもぎ取った。「女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあるか」という預言者の問いに対して、滅亡にひんした城内から次のような答えがあった。「わが民の娘の滅びる時には情深い女たちさえも、手ずから（→みずから手を下して）自分の子どもを煮て、それを食物とした」（イザヤ 49：15、哀歌 4：10）。また、それより1400年前に与えられた警告の預言が成就した。「またあなたがたのうちのやさしい、柔和な女、すなわち柔和で、やさしく、足の裏を土に付けようともしない者でも、自分のふところの夫や、むすこ、娘にもかくして、……自分の産む子をひそかに食べるであろう。敵があなたの町々を囲み、激しく攻めなやまして、すべての物が欠乏するからである」（申命記 28：56、57）。

神殿燃ゆ

▶ローマの将軍たちは、ユダヤ人を脅かして、彼らを降伏させようとした。彼らは抵抗した捕虜をむちで打って苦しめ、都の城壁の前で十字架にかけた。こうして、殺される者が毎日何百人とあった。そして、この恐ろしいことは、ヨシャパテの谷※₂一帯とカルバリーに無数の十字架が立てられ、その間を歩

くことさえ困難になるまで続いた。

※新共同訳では「ヨシャファト（主の裁き）の谷」（ヨエル 4：12）と表記、キドロ（ケデロン）の谷を指すと考えられる。エルサレム旧市街の東に位置し、神殿の丘とオリブ山を隔てる谷で、古代の切石作りの墓所が最も集中している。またヘブライ語聖書の終末預言において最後の審判が行なわれるというヨシャパテの谷（英語版）は、この谷を指すと考えられている。

▶ピラトの法廷で叫ばれた「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい」という恐ろしいのろいの言葉は、このように悲惨な罰となった（マタイ 27：25）。

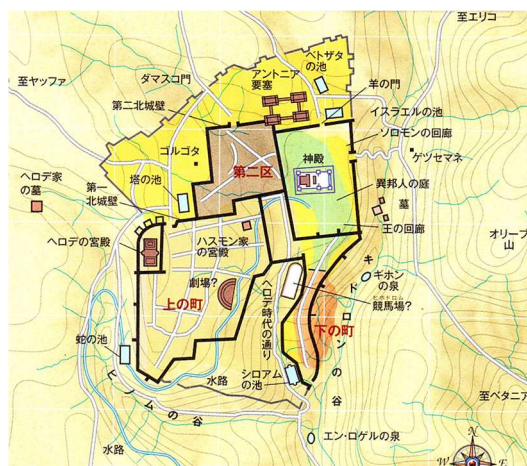
▶しかし、**ティトウスは、なんとかしてこの恐るべき状態を**

やめさせ、エルサレムを全滅から救いたいと思った。彼は、谷間に積まれた死体を見て戦慄した。彼は、オリブ山の上から壮麗な神殿をながめて、非常に心を打たれ、その石1つにでも触れてはならないと命令した。ティトウスはこの要害（→地勢がけわしく、敵を防ぐのに適している所）を占領するに先だって、ユダヤの指導者に熱心に訴え、彼がこの神聖な場所を血で汚さなくてもよいようにしてほしいと言った。もし彼らが出てきて、他の場所で戦うことを望むならば、ローマ人はだれも神殿を汚すことはしないと断った。ヨセフ自身も大いに熱弁をふるって、ユダヤ人に降伏をすすめ、自分たちを救うと共に都と神殿とを救うように訴えた。しかし、こうした言葉に対して、彼は激しいのろいの声を浴びせられた。最後の調停者として訴える彼に、投げやりが投げられた。ユダヤ人は、神のみ子の懇願を退けてしまったが、今では忠告も懇願もただ彼らの心をかたくなにしてあくまで抵抗させるだけであった。**神殿を滅ぼすまいとしたティトウスの努力はむだであった**。彼より偉大なお方が、その石1つでもくずされずに、他の石の上に残ることはないと言っていたのである。

▶ユダヤの指導者たちの盲目的頑強さと、城内で行われた憎むべき犯罪とが、ローマ人の恐怖と激怒をあり、ティトウスはついに、神殿を襲ってこれを占領することをきめた。しかし彼は、できることならば神殿を破壊から守ろうとした。けれども彼の命令は無視された。彼が夜、天幕に帰ったあとで、ユダヤ人は、神殿から城外に出て、敵の兵隊を攻撃した。交戦中、1人の兵士が柱廊のすきまから中へたいまつを投げ込んだ。たちまち、神殿の回りの杉材のへやは火に包まれた。ティトウスは将軍や兵隊をつれてその場に行き、火を消すように兵隊たちに命じた。しかし、その命令は顧みられなかった。怒り狂った兵隊たちは、神殿に隣接したへやにたいまつを投げ込み、そこに避難していた多くの者を剣にかけて殺した。血が神殿の階段を川のように流れた。幾千というユダヤ人が死んだ。戦いの物音に混じって、「イカボデ」※3ー栄光は去ったと叫ぶ声が聞こえた。

※3：新共同訳では、「イカボド」（サムエル記上 4:21、14：3）で、「栄光はいずこ」「栄光は失われた」の意味。

▶ティトウスは、兵隊たちの激しい怒りをしずめることが不可能であることを知って、将校たちと共に中に入り、神殿の内部を調査した。彼らはその壮麗さに目を見張った。そして、火はまだ聖所まで回っていなかったのが、必死になってこれを守ろうとし、飛び出して行って、ふたたび兵隊たちに火の進行を止めるように訴えた。百卒長リベラリスは、その職権によって、服従をしようとしてみた。しかし、皇帝への尊敬でさえ、ユダヤ人に対する激しい敵意と戦いの恐ろしい興奮と略奪に対する飽くことを知らない欲望の前には、どうする力もなかった。兵隊たちは、金色に輝く周囲のものがみな、燃えさかる炎に照りはえるのを見て、聖所の中には無数の宝物がたくわえられていると考えた。だれも気づかないうちに、1兵卒が、とびらのちょうつがいの中から火のついたたいまつを中に投げ入れた。建物全体は、一瞬のうちに炎に包まれた。立ちこめる煙と火のために、将校たちは、避難するほかなかった。そして、広大な建物は、焼失するままになってしまった。



エルサレム陥落

▶「それは、ローマ軍にとって恐るべき光景であった。では、ユダヤ人にとってはどうであったか。全市を見おろす山頂全体が噴火山のように燃え上がった。建造物は次々と大音響を立てて倒れ、火の海にのまれた。杉ぶきの屋根は一面の火と変わり、金色の尖塔は赤い火の柱のように輝いた。門塔は炎と煙を高く吹き上げた。近くの山々は火に照りはえ、黒い人影が恐怖と不安にかられつつ、滅亡のさまをながめていた。都の城壁と高台のほうにも、絶望に青ざめた人々や、無益なふくしゅうの念に顔をしかめた人々が群がっていた。走り回るローマの兵隊の叫び声や、炎の中で倒れる反乱兵たちのうめき声が、猛火のうなりと材木の落下する大音響に混って聞こえた。高台の人々の叫び声は山々にこだまし、城壁の回り一面に、泣き叫ぶ声と嘆き悲しむ声が満ちた。飢えて死にひんしている人々は、わずかに残った力をふりしぼって、苦悩と悲痛の叫びをあげた。

▶「城内の殺害は、城外の光景よりいっそう悲惨なものであった。男も女も、老いも若きも、反乱兵も祭司も、戦った者もあわれみを請うた者も、みな差別なく殺害された。殺された者の数は、殺害者の数を上回った。軍隊は死者の山をよじのぼって、絶滅の仕事が続けねばならなかった。」

▶神殿が破壊された後、まもなく、全市がローマ軍の手に落ちた。ユダヤの将軍たちは難攻不落の要塞を放棄したので、ティトゥスがそこに来た時には、だれも残っていなかった。彼はそれを見て驚き、これを彼の手で与えたのは神であると言った。というのは、どんなに強力な兵器でも、この巨大な要塞の胸壁を打ち破ることはできなかったからである。都も神殿もともに完全に破壊され、神殿の跡は、「畑のように耕され」た（エレミヤ 26：18）。包囲とその後の虐殺によって死んだ者は百万人以上であった。生存者は、捕虜として連れていかれたり、奴隷に売られたり、勝利者の凱旋を飾るためにローマへ引かれて行ったりした。また円形劇場で野獣の餌食になった者もあれば、流浪の民として世界中にちらばった者たちもいた。

罪の収穫

▶ユダヤ人は、自分で自分の足かせをつくり、自分でふくしゅうの杯を満たしたのである。国家としての全滅の中で、そしてそれに続いて起こったあらゆる災いの中で、彼らは彼ら自身がまいたその収穫を刈り取っているにすぎなかった。「イスラエルよ、あなたはあなた自身を滅ぼす」「あなたは自分の不義によって、つまずいたからだ」と預言者は言っている（ホセア 13：9・英語訳、14：1）。彼らの苦難は、神の直接の命令によって下った刑罰のように言われることがよくある。こうして大欺瞞者は、自分自身の行為をかくそうとしているのである。ユダヤ人は、神の愛と憐れみを頑強に拒否して、神の保護を彼らから退け、サタンが思いのままに彼らを支配するにまかせたのであった。エルサレムの滅亡の時に行われた残虐行為は、サタンの支配に応じる者にサタンがどんな執念深い力をあらわすかを示している。

▶われわれは、自分たちの享受している平和と保護が、どんなに多くキリストに負うものであるかを、知ることができない。人類が全くサタンの支配下に陥らないようにしているのは、神の抑制力である。神が慈悲と忍耐をもって、悪魔の残酷で悪意に満ちた力を止めておられることを、不従順で恩を知らない者たちは、大いに感謝しなければならないのである。しかし、人間が神の忍耐の限度を越える時、この抑制は取り除かれる。神は、罪に対する宣告の執行者として罪人の前に立たれるわけではない。しかし神は、**神の憐れみを拒んだ者をそのなすがままにされるのである。彼らは、自分たちがまいたものを刈り取らなければならない。**退けた光、軽んじ、無視した警告、ほしいままにした欲情、神の律法にそむいたことなどはすべて、まかれた種であって、それは必ずその収穫をもたらすのである。神の霊は、頑強にそれを拒んでいると、ついには、罪人から離れてしまう。すると、もはや心の邪悪な感情を抑制する力がなくなり、サタンの悪意と敵意から彼らを保護するものがなくなってしまう。エルサレムの滅亡は、神の恵みの招きを軽んじ、神の憐れみの訴えを拒む者に対する恐ろしい、そして厳粛な警告である。罪に対する神の憎しみと、罪人に下る刑罰の確実性に関する、これ以上の決定的証拠はない。

現代に対する神の警告

▶しかし、エルサレムに下った刑罰に関する救い主の預言は、もう1つの成就を見なければならない。

あの恐ろしいエルサレム滅亡も、そのできごとのほんのかすかな影にしかすぎないのである。すなわち、われわれは、選ばれた都の滅亡のなかに、神の憐れみを拒み、神の律法をふみにじってきた世界の運命を見るのである。この地上で、幾世紀の永きにわたって罪を犯し続けてきた悲惨な人類の歴史は、まことに暗いものである。それを考える時、だれしも心痛み、気はなえてしまう。神の権威を拒否する結果は、実に恐ろしいことである。

➤しかし、さらに暗い光景が未来に関する啓示のなかに示されている。すなわち、混乱、争闘、革命、「騒々しい声と血まみれの衣を持った戦士の戦い」（イザヤ 9：5・英語訳）といった過去の歴史も、神の霊の抑制力が悪人たちから全く取り除かれ、人間の欲情とサタンの怒りを止めるものが何もなくなるその日の恐怖と比べる時、ものの数ではないのである。その時、世界は、これまでかつてなかったほどに、サタンの支配の結果を見るのである。

➤しかし、その日、エルサレムの滅亡の時と同じように、生命の書に記されたすべての神の民は救われる（イザヤ 4：3、4参照）。キリストは、忠実な者を集めるためにもう1度来ると言われた。「そのとき、人の子のしるしが天に現れるであろう。またそのとき、地のすべての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。また、彼は大きいなるラッパの音と共に御使たちをつかわして、天のはてからはてに至るまで、四方からその選民を呼び集めるであろう」（マタイ 24：30、31）。その時、福音に従わない者は、彼の口の息をもって殺され、その来臨の輝きによって滅ぼされる（Ⅱテサロニケ 2：8参照）。昔のイスラエルと同様に、悪人は、自分自身を滅ぼし、自分の不義のために倒れる。彼らは罪の生活によって、神と一致した生活から遠く離れ、彼らの性質は悪に染まってしまった。そのため、神の栄光のあらわれは、彼らにとって焼き尽くす火となるのである。

➤われわれは、キリストの言葉に示された教訓をなおざりにしないように注意しなければならない。キリストは、エルサレムの滅亡について弟子たちに警告を与え、彼らが逃れることができるように、滅亡の近いことを示すしるしをお与えになった。そのように、彼は、最後の滅亡の日について世界に警告を發し、すべてのものが来たるべき怒りから逃れるように、その近いことを示すしるしをお与えになった。「また日と月と星とに、しるしが現れるであろう。そして、地上では、諸国民が悩み」とイエスは言われた（ルカ 2：25、マタイ 24：29、マルコ 13：24-26、黙示録 6：12-17参照）。

➤キリストの再臨に関するこうしたしるしを見る者は、「そのことが戸口まで近づいている」ことを知らなければならない（マタイ 24：33・英語訳）。「目をさましていなさい」と彼は勧めておられる（マルコ 13：35）。この警告を心にとめている者は、暗黒のうちに取り残され、その日が不意に彼らを襲うことはない。しかし、目をさましていない者にとっては、「主の日は盗人が夜くるように来る」のである（Ⅰテサロニケ 5：2、3-5参照）。

➤今、世界は、ユダヤ人がエルサレムに関する救い主の警告を受け入れなかったのと同様に、現代のためのメッセージを信じようとしないのである。しかし、いずれにしても、神の日は、神を信じない者に不意にやって来る。生活はいつもと変わりなく続き、人々は快樂にふけり、事業や商売や金もうけに熱中し、宗教家が、世界の進歩と知識の増加を賞賛し、人々が偽りの安定に眠りをむさぼっている時、その時に、真夜中の盗人が不用意な家に忍び込むように、突然、滅亡が軽率で神を信じない人々に臨む。「そして、それからのがれることは決してできない」（Ⅰテサロニケ 5：3）。